梅龍の話

小山内薫

青空文庫

著いた晩はどうもなかつたの。繪端書屋の女の子が、あたしのお煎餅を泥坊したのよ。それをあたしがめつけたんで大騒ぎだつたわ。でも姐さんが可哀さうだから勘辨してお遣りつて言ふから、勘辨してやつたの。　赤坂のお酌梅龍が去年箱根塔の澤の鈴木で大水に會つた時の話をするのである。姐さんといふのは一時は日本一とまで唄はれた程聞えた美人で、年は若いが極めて落ちついた何事にも襤褸を見せないといふ質の女である。これと同じ内の玉龍といふお酌と、新橋のお酌の若菜といふのと、それから梅龍の内の女中のお富といふのと、斯う五人で箱根へ湯治に行つてゐたのである。梅龍は眼の涼しい鼻の細い如何にも上品な可愛い子だが、食べる事に掛けては、今言つた新橋の若菜と大食のお酌の兩大關と言はれてゐる。梅龍の話に喰べ物の出て來ない事は決して無い、　水の出たのはその明くる日の晩よ。あたしお湯へ這入つて髪を洗つてゐたの。洗粉を忘れて行つたんでせう。爲方がないから玉子で洗つたのよ。臭くつて嫌ひだけど我慢して。さうすると、なんだか急にお湯が黒くなつて來て、杉つ葉や何かが下の方から浮いて來るのよ。妙だと思つてると、お富どんが飛んで來て、「水ですから、逃げるんですから、水ですから、逃げるんですから。」ツて大慌てなの。何だか分らないから、よく聞くと、山つなみとかで大水が出たから逃げるんだつて言ふんでせう。それから大急ぎでお湯を出たの。髪がまだよく洗ひ切れないんでせう。氣持が惡いから香水をぶつかけたら、尚臭くなつちまつたの。爲方がないから洗ひ髪をタオルで向う鉢巻なの。好い著物は汚すといけ

ないからつて、お富どんがみんな鞄の中へ納(しま)つてしまつたんでせう。あたし宿屋の貸浴衣の長いのをずるずる引き摺つて逃げ出したの。でも若し喰べ物が無くなると困ると思つたから、牛の鑵詰と福神漬の鑵詰の口の明けたのを懐(ふところ)に捩(ねぢ)込んで出たの。ところが慌てて福神漬の口の方を下にしたもんだから、お露(つゆ)がお腹(なか)の中へこぼれてぐぢやぐぢやなの。氣味が悪いつたらなかつたわ。

外へ出ると、眞暗で雨がどしや降りなの。半鐘(はんしよう)の音だの、人の騒ぐ聲だのは聞えるけど、一體どこにどの位水が出たんだか、まるで分らないのよ。兎に角向う側の春本つて藝者屋へ逃げるんだつて言ふから、あたしも附いて行くと、もうそこの家は人で一ぱいなの。鈴木のお客さんをみんなそこへ逃がしたんでせう。下駄なんか丸でどれが誰のだか分らないやうに澤山脱いであるの。

その内に向う川岸の藝者屋が川へ落ちたつて言ふのよ。なんだか少し恐いと思つてると、水(すゐ)力(りよく)が切れて電氣がみんな消えてしまつたの。

蝋燭を上げますから一本宛お取りなさいつて言ふ人があるの。それからみんな手探りで一本宛貰ふのよ。あたしそつと二度手を出して二本取つてやつたわ。あたし達はそれから二階へ通されたの。貰つた蝋燭は、大根(だいこ)の輪切(わぎ)りにしてあるのを臺にして、それへ一本宛さして、みんな自分の前へ一つ宛置いてるのよ。姐さんはお守りをちやんと前へ置いて、お行儀よく坐つて兩手を合せて一生懸命に何か拝んでゐるの。

春本の藝者はあたし達を東京の藝者だと思つたらしいの。　梅龍は時々こんな物の言ひやうをする。自分は藝者といふ者と一向關係がないやうに言ふのである。それではお嬢さんぶつてゐるのかと言ふと、さうでもないのである。要するに唯何でも構はず思つた通りをどしどしやべるのである。　だけど、聞くのも惡いと思つたんでせう。なんだかもぢもぢもぢもぢしてるのよ。「こんな所にゐては充(つま)りません。」だの何だのつて言ふの。なんだか愚痴見たいな心細い話ばかりするのよ。

その内に向うの山が崩れたツて噂なの。

すると何だか、轉がつて來たものがあるから、見ると、おむすびなの。一つ宛つきや呉れないのよ。それでもお腹が減つてたからおいしかつてよ。姐さんはどうしても喰べられないつて言ふから、あたし姐さんの分も喰べて上げたの。お數(かず)は懷の福神漬を出したんだけど、若菜さんは、そんなお腹ん中でこぼれた物なんか穢(きた)なくて喰べられないつて言ふの。だから、あたし一人で喰べたわ。

たうとうその晩は夜明かしよ。

朝の三時頃にお星樣が見えたの。その時のみんなの喜びやうつたら無かつたわ。

明くる朝は、又雨風がひどいのよ。いつまでそこの藝者屋にもゐられないし、それにもう塔の澤は一體に危(あぶな)くなつたから、今度は湯本(ゆもと)の福住(ふくずみ)へ逃げるんだつて言ふのよ。

出ようと思ふと、床の間に紙入が一つ乘つてるのよ。あたし姐さんのだと思つたから、澄ま

して自分の懐に入れつちまつたの。すると、そこへどつかの奥さんが上つて來て、「あの、若しやこの床の間に紙入が乘つてはゐませんでしたかしら。」つて、あたしに聞くのよ。さあ、あたしどうしようかと思つちまつたわ。あたしは確に姐さんのだと思つてるけども、若し姐さんので無ければ、その方のに違ひないでせう。でもそこで自分の懐から出して聞いて見る譯にも行かないわ。自分の懐から出して見せて、若しその奥さんのだつたら、きまりが悪いでせう。だから、あたし目を白つ黒しながら、「いいえ。そんな物ありませんでしたよ。」つて云つたの。さうすると、「さうですか、どうも失禮しました。」つて、その方は直ぐ下へ降りておしまひなすつたの。

　姐さんは恐い顏をしてよ。「梅ちやん。お前さん、知つてゐて隱してゐるんぢやあるまいねえ。人間てものは、かういふ時には妙な氣を起し易いもんだから、氣を附けなくちやいけないよ。お前さん若し持つてるなら、お願ひだから出してお呉れ。」つて言ふんでせう。あたし何だか氣味が惡くなつて來て、「だつて、これは姐さんのでせう。」つて、懐から紙入を出して見せたの。すると姐さんは尚と恐い顏になつてよ。「ほら御覽。持つてるぢやないか。よそ樣の物を懐へ入れるといふ事がありますか。」つて言ふの。「だつてあたし姐さんのだと思つたんですもの。」つて言ふと、「直ぐ下へ持つてつてお返しして入らつしやい、」つて言ふのよ。それから、あたし下へ持つてつて、「今よく探しましたら、戸棚のわきにありました。」つてその奥さんに渡したの。奥さんは幾度も幾度もお禮を言ふのよ。ほんとに、あたしあんなに困

つた事は無かつたわ。顔がぽつぽして、汗びつしよりなの。

それから仕度をして外へ出ると、ざあざあつて雨なの。橋を渡らうとすると、橋の板が一枚々々めくれさうにしてゐるのよ。姐さんは死んでも渡るのは厭だつていふの。でも逃げないと危いからつて、あたしとお富どんで、抱へるやうにしてやつと渡らせたの。あたしも若菜さんも平氣なものよ。あんな面白い事なかつたわ。大抵な人は一度斯ういふ目に會ふと懲りるものだが、梅龍は一向平氣なものである。これから却つて水が好きになつたと言ふのだから驚く。こなひだも溜池に水が出て、梅龍の家の揚板の下まで水が這入つた時も、自分の荷物だけはちやんと二階の安全な所へ納つて置いてから、尻つぱしよりで下をはしやぎ廻つたといふ利己的な奴である。

やつと湯本の福住へ着いて、やれ安心とお湯へ這入つてると、こゝも危くなつたから、又逃げるんだつて言ふの。大變な雨風で傘も何もさせやしないのよ。姐さんは、お金がないと困るつて、信玄袋だけ持つて逃げたの。

やつと別館へ着いたと思つたら、姐さんが目を廻してひつくり返つて了つたの。別館にはもう大勢お客が逃げて來てゐるのよ。するとそのお客の中から、大學生見たいな方がどういふ訣だか、マントで顔を隱して、コップに注いだ葡萄酒をマントの下から出して下すつたのよ。それを飲むと姐さんは直ぐ氣が附いたの。あんまり心配したり雨に濡れたりしたからなんでせう。

この事はその後都新聞へ文章面白く書かれた。その大學生は或博士の祕藏息子であつた。梅

龍の姉は大學生の親切が元で思はぬ戀に落ちたといふ風な極古風な艶種であつたが、梅龍はいつも「まさか。」と言つて、否定するのである。　それからお醫者を呼ぶと、芝居のお醫者さん見たいなお醫者さんが來てよ。そりやあ、ほんとに芝居の通りよ。いやに勿體ぶつて。それで藪醫者なの。なんにも分りやあしないのよ。たうとう終に分らないものだから、家の方が水で危いからとか何とか言つて、逃げ出して行つてしまつたのよ。ほんとにあんなお醫者つて始めて見たわ。でも、姐さんは直ぐよくなつたの。

　別館では大勢で焚き出しをしてるのよ。あたし前の晩におむすび二つ喰べたつきりでせう。お腹が減つてたから隨分喰べてよ。姐さんの分もお富どんの分も大抵あたしが喰べちまつたの。

　明くる日お天氣になつたから、玉龍さんと三人で玉簾の瀧へ行つて見たの。方々、水が往來を流れてゐて面白かつたわ。玉簾の庭はめちやめちやなの。瀧はいつもの倍の倍位大きくなつてゐるのよ。あのお池の側の離れ見たいなものね、あれなんかも流れつちまつてゐるのよ。

　なんにも喰べる物がないから、お茶屋で懷中じる粉を買つて、お湯で解いて飲んだの。そしたら小さい日の丸の旗が出てよ。旅順口なんて書いてあるの。餘つ程古い懷中じる粉なのねえ。　懷中じる粉は買つたのではないのである。お茶屋ではもう何處かへ逃げてしまつて誰もゐなかつたのである。梅龍達はそこらに落ちてゐた懷中じる粉を拾つて來て水で解いて飲んだのである。これはもうお富に聞いて、わたしはちやんと知つてゐる。

　それから歸り道に大きな石を拾つたの。それは隨分大きな石なのよ。三人で一生懸命に持ち

やげたの。どうかしてこの石で姐さんを欺して遣らうと思つて、新聞屋へ寄つて、新聞紙を一枚貰つたの。それからその新聞紙で石を丁寧に包んで、おはぎの積りで持つて歸つたの。

家へ歸ると姐さんは一人で本を讀んでるのよ。「姐さん、おはぎをお土産に買つて來ましたよ。」つて、石を出すと、姐さんは本から眼を放さないで、「あいよ。」つて手を出したの。受けると馬鹿に重いもんでせう。きやあつて言つて驚いて庭へ投げ出しちまつたの。地響きがしてよ。姐さん隨分怒つたわ。

庭に穴があいたもんだから宿屋の人にも叱られてよ。でも隨分面白かつたわ。

水の時の話はそれつきりだけど、まだ跡で面白い事があつてよ。あたし達の泊つた箱根の春本の藝者で小玉とか何とかいふ人が、この頃赤坂へ來てゐるのよ。こなひだ三河屋で一緒になつたら、向うの方で頻りに水の時の話をしてゐるのよ。あの時は家へ來て泊つた鈴木のお客に餘所行の下駄を二足とも穿いて行かれてしまつて、あんな困つた事はなかつたつて言つてるのよ。水が濟んでから二三日してお座敷へ行かうと思ふと下駄が足駄も駒下駄も兩方とも無かつたんですつて。

あたし、どきつとしてよ。あたしが穿いて出た下駄に違ひないんですもの。あたしあの時なんでも構はず出てゐる下駄を突つかけて出た覺えがあるの。

それから、あたしその小玉さんとか言ふ人にあやまつたわ。あたし、あやまるの大嫌ひだけども、泥坊つて言はれるのは厭だからあやまつたの。そしたら、向うぢやもうあたしの顏よく

覺えてゐなかつたわ。損しちやつたわねえ。

（明治四十四年十二月「中央公論」）

青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集　34　岡本綺堂・小山内薫・眞山青果集」講談社
　　1968（昭和43）年6月19日発行
初出：「中央公論」
　　1911（明治44）年12月
入力：網迫、土屋隆
校正：小林繁雄
2006年7月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

梅龍の話

小山内薫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/